

差し伸べられなかつた手

古川 智教

【登場人物】

女

男

女の子の手

若い女

若い男

別の若い女

門番

精神科医（門番と兼ねても可）

見知らぬ男（男と同一）

【あらすじ】

タイトル 差し伸べられなかった手

作者 古川 智教

舞台奥の一面は白い壁で、白い壁の前には数段の階段がある。女が壁の中央に立って、左手を差し伸べると、肩より上は見えない男の手が亡霊のように伸びてきて女の手に触れようとするが、触れることは叶わない。今度は女が右手を差し伸べると、肩より上は見えない女の子の手が伸びてきて、女の手に触れようとするが、触れることは叶わない。男は女の死んだ夫と思しき人物の手。女の子は女の死んだ娘と思しき人物の手。生者と死者の手が何度もかたちや方法を変えて、繋がり合おうとする試みと女の独白が続く。

次に舞台は死者の国へと移行し、草原にぽつりと建つ冥府の門が舞台中央に現れる。登場するのは白い壁の前に立っていた女の若かりし頃と思しき若い女と、死ぬ前の夫と思しき若い男。生と死の境界での越境と触れようとするも届かない手のあり方の提示。

子供のときに死んだ娘が成長したと思しき姿をして現れ、母と思しき女に対して自らの死について語りかける。

四人が去った後、冥府の門には門番が立っており、草叢の足跡から死者のみならず、生者までがここに訪れていたことに気づき、連れ戻そうと、死者の国であり数多の手を製造している「街」へと探しに向かう。

「街」を訪れていた若い女が冥府の門のところまで帰ってくると、冥府の門は破壊された後で、残骸が辺りに散らばっている。若い女が白い壁の前で、女がしていたように手を差し伸べると、亡霊の手が伸びてきて触れようとする。叶ったと思った瞬間に暗転し、若い女は女の姿となつて白い壁の前に倒れている。永遠に実現しないかと思われていた手の接続が女と若い女、若い男と別の若い女が再び一堂に会して、語りかけ合ったとき、不可能に思えた生者と死者、過去と現在との結びつきが行われる。白い壁の前でも手と手が繋がり合う。

物語の終わりで白い壁の前に立つ女が精神病院にいたことが明らかになる。死んでいるはずの男が女に語りかけると、女は涙を流す。

差し伸べられなかった手

さいあいのひとへ

一面の白い壁。壁の前には数段の階段がある。女がひとり、壁を背にして立っている。項垂れたまま、しばらくの間、身動きひとつしない。明るすぎる眩いばかりの白い照明に当てられている。女は僅かに顔を左側に向け、垂れ下がった左手を少しだけ左の方に上げようとすする。しかし、すぐに諦めて、力なく女の左手は元の位置に垂れ下がる。今度は右手で同じことを繰り返す。

女

駄目。手だけでは。もう少し、このまま。真つ白な沈黙の言葉で。あなたたちの精神が満ちてくるのを待たないと。精神。思考のない精神。意志のない精神。死んだ精神。精神がもはや精神ではなくなくなっていくときの最期の息。息絶えたあとで、一回だけ、たった一回だけ、息を吹き返す精神。そして、また消える。

ふうつと息が抜けていく。消えるために甦った精神だけを精神と呼ぶ。精神になりきれない精神は精神と呼んではいけない。そう、あなたたちに教わった。生前に。いいえ、死の間際に。それらすべてを舞台の上へ。駄目。あなたたちは上げられない。あなたたちは奈落にいて。でも、もう一回だけ……もう一回だけなら……

女は再度、左手をゆつくりと壁沿いに上げていく。男の右手だけが白い壁に現れる。壁から出ているのではなく、切断された手のように肩までしか見えない状態で。肩より上は存在していない状態で。男の右手の指先が女の左手の指先に触れようとしたとき、女は拒絶し、腕を勢いよく振り下ろす。男の手は一瞬にして消える。

女

駄目。やっぱりまだ現れないで。あなたが現れるのはもつと後。あの子が帰ってきて、あの子とご飯を食べて、あの子をお風呂に入れて、精神がひとときの間、我に返ることなく安寧に身を委

ね、水の揺蕩いがこの部屋の床を満たして、あの子の身体がぶかぶかと浮かんで、漂流して、わたしの元に、今この時の、精神ではなくなったわたしの元に戻って来てから。わたしのものだった、そう、かつてわたしのものだったと信じ込んでいた精神が、あの子の身体に入っていくのを見届けてからにして。わたしのものではないからこそ、あの子はあの子になれたのに。それなのにどうして、あの子はあの子でなくなっていくとしたの？精神を、これはわたしのものと突きつけて。盗んだものをこっそりと元あった場所に返すように。でも、盗んで返した痕跡が分かるようにわざと位置をずらして。見えない手紙がその下に差し挟まれているように見せて。わたしは受け取らなかった。わたしは拒絶した。わたしはあの子じゃないから。かつてあの子であったこともないから。せめて、あなたの手がわたしを越えて、あの子の手まで届いてくれていたら……

(蛇口から水が流れている音。水が溢れていく音。波間に揺蕩う光の照明)

女、壁に背をもたせかけたまま天を仰ぐ。

女の子の声　　ママ。

女の右側、白い壁の下の方から女の子の小さな手が現れて、女の右手を指して伸びていく。男の手と同様、切断されたように肩から下の腕と手しか見えない。

女の子の声　　ママ。

女、涙が流れそうになるのを堪えて、震えながら、右手をゆつくりと女の子の手の方へ伸ばしていく。触れるか、触れないかのところで、子供の手がぱっと消える。女の手は空を掴む。

女　　やっぱり。期待は不在と仲がいい。どこか遠くへ一緒に遊びにい

こうと約束し合い、冥府の門の前で落ち合って、不在は冥府の門の威圧感に少し怖がつている期待を優しく説き伏せ、とつても素敵な場所だからと、背中を押しながら門をくぐらせ、向こう側へと連れ去っていく。でも、不思議と虚しくはない。手に手を取って、冥府の草原を駆け抜けている様が目に浮かぶから。草原の先には何があるんだろうって、期待は胸を膨らまし始める。不在はやつと期待が自分のものになったと心の底から喜ぶ。この先に待ち受ける不在の仲間たち、喪失、消滅、空虚、失望、そして、死、彼ら彼女らに会わせることができる。案内人としての自分の役目を誇りに思っている。期待と不在、それぞれがお互いの運命を受け入れたときこそが精神をその軛から解き放てる。精神がもはや精神ではなくなり、時を止める。停止した時は、滞留した時間は、あなたそのものの、あの子そのもの。過ぎ去っていかないよう堰き止めてくれるのが、精神ではなくなった、あの夕暮れのような、まどろみに似た光だった。きつとあの子も今頃、不在と戯れているに違いない。まどろみに似た光を浴びて、精神ではなくなっているに違いない。心からそう願わずにはいられない。精神は私が引き受けたのだから。まどろみを捨てた不眠は私の領分だから。あの子と不在は、公園の砂場か、海辺の隠れ家か、雲の上の絨毯で、寝転び、じゃれあい、時には噛みつき合って、いのみ合って、別れるかと思いきや、もう離れられない関係だと悟って、仲直りの証にお互いに抱き合って、溶け合って、ひとつになっっていく。そう、あの子の名前は期待。

(徐々に夕暮れのような橙色の照明へと変化していく)  
暗転。

冥府の門が舞台中央に現れている。

白い壁に寄りかかる女は俯いて、黙ったまま動かない。

舞台上手から男女の若いカップルが手を繋いで現れる。

若い女が若い男を先導している。

若い女  
若い男

ほら、あそこ。見えるでしょ  
気が進まないな。ほら、もう日が沈みそうだし。僕たちの愛も沈みそうだし。君のパンティだって沈みそうだし。そのうち、あのいかつい門だっていつか沈むんだろ？地中深く。取り返しがつかないようなところまで。あつ、掘り返しがつかないようなところまでか……

若い女  
若い男

ふぎけないですよ。あの門はね、冥府の門なの。  
へえ。じゃあ、俺たち死んじゃったのか。記憶にないな。心中？事故？それとも自然死？そんなわけないか。二人一緒に自然死なんて……

若い女  
若い男

自然死よ。突然死。心筋梗塞と脳卒中。  
えつ、嘘。そんなわけ……二人一緒に？

若い女

うん。そうだよ。同日同時刻。0コンマ000000000秒までおんなじ。

若い男

まさかあ。

若い女

ほんと。ほんと。

若い男

ええ。絶対、嘘だ。

若い女

……

若い男

マジか……ちなみにどつちが……

若い女

聞きたい？

若い男

んう。んう。んう。いや、聞きたくない。聞かないでおこ

う。少し聞いてみたいかも。是が非でも聞いてみたい。聞かせてください。お願いします。

若い女

どつち？

若い男

ほら、全部のパターンを網羅しておけば、もし真実を知ったとしても、その手前に戻って、やり直して聞かなかつたことにできるかなって。

若い女

そんなわけないでしょ。一度、聞いてしまったら、一度、知ってしまったら、取り消せないよ。なかつたことにはできないよ。今まですつとそうだったでしょ？

若い男

そうかなあ。でも、もう死んでるわけだし。取り消せないこととの後に来てしまっているわけだし。そしたら何がなんでも

取り消せないっていう決まりは無効になってるんじゃないかな。死後ってことは死ぬことだけが取り消せないって気がなぜかするんだよね。

若い女

えっ、なんで？

若い男

そうだなあ。例えば、一日や季節を人は循環だと思ってるけど、もし循環じゃなかったとしたらどうなる？もし、昨日の、ひとつ前の季節の、取り消しだったとしたら？一日の死後、あるいは春の死後、夏の死後、秋の死後、冬の死後が、明日、あるいは次の季節だと考えると、今日、あるいは今の季節が取り消されることで、昨日、あるいは前の前の季節がまったく同じ状態で舞い戻ってきているのかもしれないよ。前と違っていているように感じられるのは、以前の一日と季節が完璧に取り消されているから。また巡ってきたんだっていう思いの方が気のせいかもしれないじゃん。だから、人は循環という考えを捨て去るべきなんだ。循環なんて考えるから、取り消せないと思っちゃうんだよ。一回こっきりだけで、取り消されることで、もう一回こつきりを生きられるようになるんだ。一遍死んでるのにもかかわらずね。

若い女

じゃあ、言わない。私たちの死因なんて、はじめから言わなかったことにする。死んでいなかったことにする。今までやってきたことが取り消されるなんてやだ。忘れたとか、思い出せないとかだったたらまだしも、思い出すチャンスも、たとえ思い出さなくても、心のどこかにずっと残ってるって願うことも、心の中じゃなくてもいい、この世界のどこか、誰にも見つけられない辺境には残ってるはずだと、僅かな希望を託すこともできなくなるなんて……絶対、おかしいよ。

若い男

確かに。おかしいね。この世界は狂ってる。なかったことになったり、作り変えられたりするんだから。さやか、あかり、ことね。あれ？君の名前なんだっけ？まあいいや。君だってほら、今、死因を言おうとしたことをなかったことにしようとしたじゃん。そういうもんなんだよ。皆、なかった



ことにしたいんだよ。

若い女 訳わかんない。ゆうすけ、しんじ、みなと。あれ？あなたの名前なんだっけ？

若い男 俺の言ったことは忘れてくれ。俺の名前を忘れたみたいだ。

若い女 忘れられない！

若い男 忘れたじゃん！ふう〜

若い女 ふう〜って何？

若い男 いや、一旦、落ち着こうと思って。あ〜、これが地獄の門か。

若い女 冥府の門！

若い男、冥府の門の周囲をぐるりと回る。  
見上げたり、手で触れようとしたりする。

若い女 触っちゃダメ！

若い男、慌てて手を引つ込める。

若い男 名前の割には大したことないな。

若い女 言うと思った。自分の死を認められない人は皆そう言うの。

若い男 へえ〜

若い男と若い女、冥府の門を挟んで向かい合う。

若い男 ねえ。こうしていると、俺が死んだみたいだよ。君に見送られようとしてるっていうか。今生の別れの場面っていうか。

俺、泣くべきかな。

若い女 (微笑んで) 逆かもね。私だけが死んで、あなたは死にきれなかったみたいだ。

若い男 (微笑んで) そう……かもね。

二人、立つ位置を入れ替えるためにそれぞれ冥府の門を反対方向に

ぐるりと回る。

背後の暗闇で女が二人に対して右手を伸ばそうとする。けれども、女の背中は壁に張りつけられているせいで、手が届かず、力が潰えたかのようにパタツと腕を下ろす。その間に二人の位置は入れ替わっている。

若い男 うん。こっちの方がいいかな。

若い女 ひどい……ダメ！もう一回！

二人はもう一度、冥府の門の周囲を回って、元の位置まで戻る。再び、背後の暗闇に立つ女が今度は左手を伸ばそうとするが、先程と同じでパタツと腕を下ろす。

若い男 また死んじゃった。

若い女 じゃあ、私もそこに連れてって。

若い女は右腕をゆつくりと上げていく。

若い女の右手が冥府の門の間を越えていく。

若い男の右手がおそろおそろ若い女の掌を上にした右手へと伸びていく。

手が触れ合おうとしたところで、暗転。

再び、夕刻の明かり。

若い女の身体は既に冥府の門を越えており、二人は死の側で抱き合っている。

若い女 もう一回してほしい。今度は向こう側で。

二人はゆつくりと身を引き離し、若い女は後退って、若い男の手を引いていく。

若い女の背中が冥府の門に差し掛かったところで、暗転。

冥府の門の向こう、生の側でまたも二人は抱き合っている。  
暗転。

再び、若い女は生の側、若い男は死の側に立って、向かい合っている。

若い女

やつぱりこうなるのね。一緒に行けると思ってたのに。はなればなれにならなきゃいけない運命で、決して逆らえないんだね。分かつてる。けど……

冥府の門の辺りの照明は暗くなり、背後の白い壁の前に立つ女に照明が当てられる。

女

けど、あの夏の、降りしきる雨でずぶ濡れになりながら、あなたを抱きかかえたときのことを四六時中思い出さないといけないのはあまりにも辛すぎる。切り取られた精神を捧げ持つイメージでなんとかこの苦境を乗り越えていこうとしていた。空に対して祈りを捧げるような素振りも長くはもたない。分厚い雨雲に僅かな切れ込みを入れても、すぐに閉じられるのがおち。そうしていつときの晴れ間が耐えがたい苦痛になっていく。もう二度と晴れることがないよう、雲が流れることがないよう、手を合わせて、祈りに祈り、祈ったほど。だけど、合わせたはずの手の片方がどこにもいない。手さえ振らずになくなつた。せめて手形だけでもどこか小雨の降る泥濘の表面に残しておいてほしいと願う暇すら与えずに。そつと残つた方の手を重ねて、祈りの代用としようとする、そんなほんの僅かの望みさえ亡き者にしたい悪意が潜んでいる気がしてくる。掌がすつと空気を押して、消えた片手を探すことに死ぬまでの時間を費やすよう仕向ける、雨雲の向こうの誰かがいると、私ははつきり知ってしまった。いつまで経っても祈ることに辿り着けない。分厚い雨雲の上の晴天を雨に打たれている間は仰ぎ見ることができないのと同じように。あの夏の路上で息絶えようとするあなたを抱きかかえ、安らかな死が与えられる

のを願ってしまふほどに表には現れない苦痛があなたの奥深くで蠢いているのを感じ、死が最後に生に及ぼす小刻みな震えが私の掌に間断なく伝わってくる。それと呼応するようにほとんど雨に流され、どこから湧き出してくるのかわからない一筋の血が、首から肩へ、肩から腕へと薄い赤い色を肌に移ませながらも明確な線を引き、二の腕、肘、前腕、手首を伝い降りるときにはとぐろを巻いて、行き着く先であるあなたの手、あなたの指先を指しているのが私には誰よりもはっきりと目に見えていた。目に赤い筋が一本走っているのが映っていて、あなたの血はその投影に過ぎないという疑いが、あなたの息を吹き返させるきつかけとなつてくれたら……でも、それは叶わない。いつそのこと、これ以上ないほどの至近距離であなたの血が私の前に雨のように降り注いでくれたら……怒濤のごとく襲いかかつてきてくれたら……あなたとの血が私を飲み込んで、私があなたの血を飲み込んでいたら……あなたの死と私の死がぴったりと一致して、私たちは雨に打たれることなく、快晴の遊歩道を車に轆かれたりせずに悠々と散歩していられたかもしれないのに……もちろん、死後の世界で、死後の遊歩道で、ここ冥府の門を遙か昔に通り抜けて、もうその存在すら忘れかけた頃合いで、やっと死の意識が遠ざかり、安らぎの正体を生と死の完全なる一致に見出し終えて、何もかもが真つ白な同一性に帰着していくのをただ黙って眺めていれば、あなたと私は共に消え去ることができるようになる。それまでの間、手を繋いで離し、繋いで離し、そうして何度も繋ぎ直してみたり、離れる直前でやっぱりやめてみたり、もう二度と離れないと誓いを立てて爪を食い込ませてみたり、互いの存在の手と不在の手をそれぞれ互い違いにすべてのパターンを網羅するように組み合わせしてみたり、何を確かめているのかわからなくなるまで続けながら。ぎゅつと、骨が折れても、もう死んでるんだから構わないと開き直って、力強く。骨まで跡形もなく燃やされた後だというのに。もう一度、骨を見出せるところまで深く探つていこうとして。あらん限りの力を込めて。遺灰が戻りたい場所はそこ、あなたの手、あなたの指先に包まれた骨の奥、あなたに伝え

ることだけを使命としている神経の束。むしろそこから溢れ出した血なのだと証明したくて、あなたの血は雨に打たれながらも必死に乾こうとしていたのかもしれない。皮膚の繊維に染み込んで癒着し、離れたくない意志を明確にして伝えようとしていたのかもしれない。けれど、私の悲痛な叫びによって伝達を蝕まれ、本来あなたの血には備わっていないはずの感情が波立ち、それが夏の驟雨によって堰き止められ、そのせいであなたの全身は冷たくなつていく。どれだけ強くあなたの手を握つても、あなたの手は力なく私の手から離れ、落ちていこうとする。自らの重みを支えきれなくなつて落下する夏の雨と同じ。死が降つてきているの。

女、白い壁から身を引き剥がし、硬直している若い男と若い女に近づいていく。

女の代わりに別の若い女が女の子の手が現れたところ、舞台下手から現れ、白い壁に背中をつけて、天を仰ぐ。

女は冥府の門を挟んで向かい合わせに立つ二人の周辺を巡つて歩き、二人の顔や身体を矯めつ眇めつして見回す。

若い男の前で立ち止まり、顔を近づけて、若い男の目を覗き込む。

女

濁つてる。あのと時の目じゃない。純粹な死があなたの目を裂くように横切り、あなたを連れ去ろうとしたときに宿した澄みきつた瞳の色をしていない。青灰色で未来を見通すよりは疾うの昔に過ぎ去つたものに変えてくれる、不安を安心に変えるというよりは内に向かう視線でもつて外に対して盲いているように見せかけ、不安と安心が共に陥っている罫の在り処を教えてくれる、あの冷えた眼差しをしていない。姿かたちはそのままにあなたの両目だけを別のと取り替えたみたい。だから、私が見えないね。

女は若い男の目に手をかざして、視界を遮る。  
ただし、顔には決して触れない。

女

こつちの方があなたらしい。

女、手を若い男の額、頬、鼻、唇、髪、首筋へと触れることなく這わせていく。

若い男が流してもいない涙を親指で拭う動きをする。

女

泣かないで。あとでちゃんと逝かせてあげるから。今はただ黙つて、(若い男の周りを歩いて、若い男の身体に触れないよう注意しながら手をかざして) 時をやり過ぎして。そしたら、きつといつか報われる。いや、違う。必ず報いを受ける。受けさせる。私ひとりを残して去ったあなたとあの子に相応しい恩寵は、この世にもあの世にもたつたひとつだけ。それは今の私と入れ替わること。死後の静寂と引き換えにして、生前の喧騒を、心のざわめきをその身に引き受けること。

女、若い男の身体をぐるりと一周し、別の若い女の前を通り過ぎ、若い女の傍まで行く。

別の若い女は通り過ぎていく女に対して、右手を伸ばすが、届かない。

別の若い女

ママ。行かないで。私を置いて行かないで。いや、違う。私がママを置いていった。私は……行かない……行かないことに決めた……行っていない……そもそも行っていないなかったのに……ママが私を行ったことにした……いや、そうじゃないかもしれない……私が私を行ったように見せかけたのかもしれない……誰に対して？ママに対して？いや、違う……私に対してだ……私が私に対して、私が私の死に対して死を偽装した。そうせざるを得なかった。他に方法がなかった。そう思い込まなくては。今こうしてママが立っていた場所までやって来れなかった。かつて私の身体だったものを身に纏えなかった。もしかししたら、私が私の身体に今、入っていつても、肌が合わないかもしれないと思っただけれど、はちきれそうに

なることも、ぶかぶかで風船のように萎んでいくこともなく、何も纏っていないかのようにぴったりだった。裸で長い道のりを歩いてきたみたいに他人の好奇心視線に慣れきっているこの身体は、使い古されて捨てられる直前で私への贈り物にしようと誰かから救い出されてきたんだと、私の死後から現在までの記憶は塗り替えられる。随分、死んでしまったときから成長したものだとして、化粧をしたこの顔も、膨らんだこの胸も、女であることを受け入れざるを得なくなつて久しいこの身体、けれどこの手だけはあのときのままのような気がする。ママにまだ小さな手を引かれて、連れて行ってもらった草原。なんていう名前だったか。名前はないのかもしれない。見渡す限りなんにもない。手を離して、私はひとり草原を駆け出した。私の胸の少し上ぐらいの位置まである草を掻き分けていかなくはいけなくて、泳いでいるようにママには見えなかったかもしれない。溺れないように、草を飲み込まないよう、必死に顔を上向きにしてひた走つて、なだらかな斜面を登りきつた。突然の風で草も私の髪も縦横に掻き乱され、細かい朽ちた草の切れ端が私の顔めがけて無数に飛んでくるのを手で防ごうと顔を覆つて、目を閉じた。ひとしきり吹き荒んだ後は、あの睡眠と覚醒が絢交ぜとなつて、灰色の夜を呼び覚ます夢のなかのような風が訪れた。草たちの全き静止は、その生き死にを偶然の風の向きや勢いに左右されることを拒絶している。草自身の生き死にのことではなく、時の経過によつて立つたまま撓垂れていこうとする人々のことを言っているんだと、草が擦れ合つたときに立てた声の残響で知る。私の瞼の裏の光景と、ゆつくりと目を開けていったときに見えてきたこの光景は、灰色の半透明の遮蔽幕に夕暮れの頬紅のような色味が差してくる、その色づけ加減まで瓜二つだった。私の意思とは関係なく、ふたつの光景は近づいていき、双子を二重写しにしたみたいに微

細な動きに至るまでそっくりとなり、全く同一性まであ  
と一步というところで落日のぶれによる差異にひれ伏し  
た。光が奇妙な星の配置による引力の影響を受けてか、  
ふたつの世界の狭間で僅かに揺れ動いてしまったせい  
で、一斉に草の反乱を引き起こしそうな気配がし始め  
た。空にいつの間にか忍び込んでいた宵の月が、遠くの  
川からよく冷えている水をここまで引いてきて、草原を  
水浸しにしようとしていた。今ちようど岩だらけの荒地  
を擦り抜けて、草原の手前に差し掛かったばかり。洪水  
は不可抗力を理由に、後戻りはきかないことを言い訳  
に、私の落ち度、つまり私がしてはならないタイミン  
グで瞬きをしてしまったばかりに生まれ出た、決して開  
けてはならないこの世の差異を、なかつたことに、有耶  
無耶にしようとしているかのよう。世界で誰ひとり瞬き  
をしないはずだった、予め仕組まれていた神聖さを装う  
べき時に。水鏡に映し出される月、水紋を描き出す風、  
動じない振りをしている岩、衝突時に頂近くまで被った  
川からの水で黒く濡れている跡を残したままなのに、そ  
して根からではなく、久しく降っていない雨以外で全身  
に浴びた水により潤いと生気を取り戻す草たち。それら  
が野に放つ不可思議な親和力で、この永遠に無人である  
べき地表を満たしていく。今や差異を殺してひとつにな  
ろうとする、抵抗をやめたふたつの光景の、以前として  
残る違いは、傷としてあつた。私の傷、私が生まれる前  
に負つたであろう傷、これまで生きてきて一度として見  
ようとはしなかつた傷。既にそこにあつたと気づくと同  
時に新しくなぞるようにつけられた、生まれたばかりを  
偽装する狡猾な傷として。私の手の甲が切れていた。一  
直線に、浅くはあるが、浮き出る骨と並んで、まるで六  
本目の指の骨を取り除いて縫合し、癒着しかかつた傷口  
がまた開いたかのよう。私の傷がふたつの光景の裂け目  
としてかろうじてここに存在していた。存在が存在しな



くなることが不在なんじゃない。存在同士の裂け目が不在なんだと私はママに言いたくなかった。裂け目の直線に沿って一筋の血が流れ出していた。手首のところで方向転換をして、ぐると半円を描き、青く浮き上がる血管に戻ろうとする意志を持つているみたい。不自然な急旋回をしたため、私は反射的に蛇に纏わりつかれたような感触を払おうと腕を上下左右に何度も振り下ろした。血が辺りに飛び散り、艶のある草の表面を汚した。当たったときの音は夢の残り香と風の効力によって打ち消されていた。その後、私の血は二股に分かれて、一方は掌の窪みに向けて流れ、聖痕のようなかたちで血溜まりができ、もう一方は腕を伝い下りていって、肘の先から今にも滴り落ちそうになっている。次第に全身の至るところから溢れ出している気になってくる。もしかしたら、目も切れてるんじゃないかって。いや、むしろ眼球を潤すように血が満遍なく視界に行き渡って、あらゆるものが隈無く血で染め上げられているだけなのに、とめどもなく私の脆い身体から熱い血が溢れ出しているという錯覚を抱いているんじゃないかって。胸の内を不安がよぎった。赤い草、赤い丘、赤い水、赤い目、赤い手、赤い私、赤いママ、それらすべてが赤い夕日を超えていく。私は丘の頂に立っていた。そうだ。ママは？不安の正体は、ママが洪水に飲み込まれているんじゃないかというものだった。一刻も早く、私は安全地帯であるこの丘からママの元へ戻らなければならぬ。存在を確かめようとして、振り返った。けれども、ママはいなかった。いや、違う。ママはもうママではなかった。見知らぬひとりの女。鋭い眼差しで私を見上げている。私を恨んでいようであるのに、なぜか、かつてママだったひとりの女は私に手を差し伸べようとしていた。途中で諦め、力尽き、決して私に手が届かないことを知っていてなおそうしたのは、私は救われないということを示すためだと

でもいうかのように項垂れていながら、口元に笑みを浮かべているのが見えた。手だけは不思議とママの手にそっくりだった。私に手を差し伸べようとするママの意志が見知らぬ女の身体を借りて、私を救い出そうと、見知らぬ女の手を超えていく手を獲得したから、ママの手だと感じたのかもしれない。手以外はまるでママが脱ぎ捨てた抜け殻を身に纏いなおして、合わない輪郭を無理に合わせようとしたばかりに自分自身にとつてさえ見知らぬとしか形容しようがない存在に成り果てたのだ。私を見上げたままで立ち去ろうとしないのは、食い入るような私の視線が気に掛かるからだろうか。見知らぬ者同士、しばらくの間、私たちは見つめ合っていた。そうか、私はもう死んでいたのか。死者を見上げる眼差しだから、死者から見下ろす眼差しだから、こんなにも見つめている実感が希薄なのかと私は得心がいく。いや、違う。私は死んではない。死んでいるはずがない。私は死ねなかった。私は私の死を死にきれなかった。私は今も、そしてこれからもずっと死につつあるだけ。私は私の死にいつまで経つても辿り着けない。だって、私は私の死を確かめられないんだから。振り返るための余白が死後には全くない。振り返ろうとする意志さえ身じろぎひとつできないどころか、意志が芽吹くきっかけそのものが内向きに収束していき、真っ黒な死の花が如何なるかたちをなすこともなく咲き誇っているところに私の存在と不在がもろとも消えていかざるを得ない場所なき場所。見えない花のかたちではない。見えないことそのものがない。黒くも見えない黒。青くも見えない青。赤くも見えない赤。花には見えない花。ママには見えないママ。私には見えない私。死には見えない死。だから、私は死なない。死ねない。いつまでも死の直前にあつて、あの落下していくときの浮遊感の只中で、不快と恐怖と悲痛に曝され続けている。それでいていつしか心地よさ

というか、ここから離れたくないぐらいに依存している、永遠を約束されている安心感でうっとりとし、放心し、身を委ねていく。仕方がない。それ以外に方法はない。慣れではなく、放棄。諦めではなく、倦怠。そうなる、誰が確かめるの？私の死を。私は死んでいないのに、他人にとつての私とは言えない私は死んだことにされている。一体、誰が私の死を確かめたの？私はそれすら知らない。知ることができない。私の死を確かめられたのはママだけだったと思いたい。何がなんでもそう信じ抜きたい。どうしてかは分からない。なぜか他の誰にも知られたくない。私とママ、ふたりだけの秘密にしておきたい。けれども私が死んだということとはもう既に公のものとなつて、知れ渡っていることだろう。たとえば、私の死が確定し、周知の事実となつていたとしても、誰も死をその手に持つことができない以上、不確かさに付き纏われているに違いない。不在とは相性がいいのだから。相互に滲み出していきながら、愛を深めていっているみたい。ママにとつてもまた私の死は不確かであり続けているはずだ。少なくとも私の生誕ほどには確かではないだろう。ママが私の死を信じられないのではなく、私の死の不確かさを信じている。そう、これが祈りというもの。祈りに祈り、祈つた結果が生と死の狭間を今ここに穿ち、そこから湧き出す清らかな水の緩やかな流れでもって境界線の代わりとなる蛇行する川を作り、生と死を仮のかたちで分割して安らぎを見出そうとし、さらには灌漑に利用して田を潤すことでその体制を盤石にしようとする。そう、死を生むのうちに取り込んで水と生命の流れで籠絡しようとする。ただ逆に言えば、私をママの元へと運んでいくための水路でもある。次第に濃くなつていく霧に包まれるにしても、ママが一旦は確かめたはずの私の死を、私がマ

マに返しにいくための流れにも利用できることを私は知ってしまった。向こう側にいるママの手に触れ、離さないようしっかりと握り締めれば、ママも私の手を握り返して、きつく骨が鳴るまで、互いの手の中に沈み込んでいけるはず。既に遺灰となつているかどうかなんて関係ない。遺灰を清らかな水で捏ね上げて、再び骨を作り出せるまで何度でも死の只中に手を差し伸べてと、ママに伝えたい。私は亡霊じゃない。

女、若い女を睨みつけながら、その周辺を巡り、若い女の背後に立つ。

女 私じゃない。

女、若い女の背中を押す。

若い女、前のめりになつてよろめきなりながら、冥府の門を越えていく。

若い女 きやつ。

若い男、両手で正面から向かつてくる若い女の両肩を受け止めるが、放り投げるように若い女の身体を脇にどかそうとする。

若い女 きやつ。何よ。

若い女、倒れそうになるのを堪えて、体勢を持ち直し、怒った顔をして舞台の端で振り返る。

若い女 何なのよ。私が私にとって私じゃないだけじゃなくて、あなたにとっての私も私じゃないってこと？ひどすぎる。あんまりよ。

女と若い男はその間、ずっと見つめ合っている。

女、自分の左手を顔の近くまで上げて、掌と手の甲を裏返して矯めつ眇めつする。

若い男もその動きに合わせてるようにして、右手の掌と手の甲を矯めつ眇めつする。

若い女

ねえ、聞いてるの？……バカみたい。さつさと手を取り合え

ばいいのに……どこへなりとも行つてしまえばいいのに

……

白い壁を背に立つ別の若い女、左手をゆつくりと伸ばしていく。

女、別の若い女の手の動きに気づいて、そちらの方に右手を伸ばしかける。

ふと我に返つて、右手の動きを左手で押し止める。

別の若い女、今度は右手をゆつくり伸ばしていく。

若い男、女と同様に左手を別の若い女の手の方に伸ばしかけるのを押し止める。

女、別の若い女が両手を左右に伸ばしきつて、天を仰ぎ、磔になつているようなのを見て、そちらに歩み寄っていく。

別の若い女の近くで、目を逸らし、舞台上手に消えていく。

若い男も女と同様の動きをして、舞台下手に消えていく。

若い女

結局はこうなる運命。死から逃れられないというより、死を

迎えにいく愚かしさ。死の微笑み、死との抱擁、死からの感謝の言葉が得られるとも思っているの？そんなこと、死んでもあり得ないのに。んっ？死んだからあり得ない？死んだら、あり得ないもあり得ない？まあ、どっちでもいいや。なんでもいいや。どうせ同じこと。同じ。同じ。同じ。

同じ。死はみんなおんなじ。死はすべてを同じにする。死を異なるものにする術を知っている者は誰もいない。何か方策がある？でも？まさか。知ってる人がもしいたら、一言も喋らないで。言葉のかけらになるような、身振りも仕草も発し

ないで。決して。私たちを巻き込まないで。私たちはもう自分たちの弔いを済ませた後のような気分浸っていて、静けさが打ち破られることには二度と耐えられそうにないから。そつとしておいて……お願いだから……今では誰も死の帰りを待つことはしなくなった。長い時に亘って、いつまでも帰ってこない死は、もう死だとは見做されなくなった。そして、遂には此岸と彼岸を結んでいた冥府の門も用済みとなつて、草原のあちこちに散らばつた破片となつている。風化に抵抗することもなく、さらさらと表面から塵を風に乗せて、出来るだけ遠くへと綿毛のように運ばせ、死とは認識されなくなつた死を死なせることがないよう、死の命脈を紡いでいけるよう、気を配るふわふわとした揺れ方で着地点を探している。根づくための最適な場所を探しているように見えて、偶然にしか頼るべき方法を見い出せないでいる。死が死ぬことはないという歴然たる事実をなんとかこの地上に芽吹かせたいと願っている。草からおこぼれをもらうみたいにならなくても下からも雨水を分け与えられ、すくすくと育っていける夢を抱いている。本当は花粉のように蜂、それも猛毒をその身に秘めた蜂に運んでもらえたら、より偶然の精度が上がりに萎れかけている元の花よりも、もつと甘い蜜を蓄えた色鮮やかで嫉妬を覚える朝露を乗せて煌めく艶やかな花卉、その夜明けを寿ぐように開きかけた淫靡さの狭間でまだ眠りから覚めて間もない雌蕊へと降り立ち、寝ぼけ眼を擦るようなさりげない受粉がひっそりと執り行われたはずなのに。そうしたいくつもの潤いが性的な夢をここかしこで花開き、死が早朝から真昼への過渡期として、絶頂を予告しつつも抑制するよう仕向けるために、我が子に両親を孕ませる、そんな逆向きの開花にまで推し進められればよかつたのに。そうすれば、連綿と続く生殖の言い訳、悪あがきの正当化にもなつたらうに。夢は逆流する蜜であり、嘔吐を催させる。再び込み上げてきた死の蜜は、射精の失敗のように喉の奥から弱々しく溢れ出て、それを一旦は膺の襲のように受け止めてくれる

濃緑色の萼からぼとりぼとりと滴り落ちていき、その一部は萼の裏側にまで回り込んで、茎を伝い降り、土に到達する頃には粘着質の乾きもたらす失望、しつかりと予期されているために風と同じ自由をもたらす失望に酔い痴れるところまで計算に入れている。土に塗れた蜜と精液の溜まり。目を逸らしさえしなければ、絶望で異なる死を表現してみせる。異なる死への転落を経て、ようやく今まさに境界は線ではなくて、破線となり、粉々に砕け散った破片となり、最終的には空気中に漂う塵となる。境界の塵を吸い込んで、死を体内化させた者だけが、帰ってこない死をいつまでも待っていることができる。私は誰？過去のママでも、過去の私でもない。ましてや見捨てられた子でもない。異なる私になる前に果ててしまった何者でもない誰かに過ぎない。この誰かの手は誰とも結ばれないのだろうから、いつそのことこの場で切り取ってしまいたい。誰かに拾われる時が来れば、嫌でも力強く握り締められ、結ばれ、反射的に握り返そうとした瞬間に相手のいる側へと引き摺り出されるだろうから。けれども、死んだ私でも、過去の私でもない私の身体はそこにはない。抱き締められることは未来永劫ない。じゃあ、今現在の私ではない私は一体どうすればいいの？

若い女、泣きながら、舞台下手へ消える。

白い壁を背にして立つ別の若い女、左手を壁に沿ってゆっくりと伸ばし始める。

切り取られた女の右手が別の若い女の左手に向かって伸びてくる。

ふたつの手が触れ合おうとするところで、雷の落ちる音がする。

続いて、激しい夕立の音。  
暗転。

女の右手は消えていて、別の若い女の左手だけが取り残されている。

別の若い女は悲しそうに俯きながら、左手をゆっくり下ろす。

別の若い女、今度は右手を壁に沿ってゆつくりと伸ばし始める。切り取られた若い男の左手が別の若い女の右手に向かって伸びてくる。

ふたつの手が触れ合おうとするところで、自動車の急ブレーキの音と衝突の音がする。

暗転。

若い男の左手は消えていて、別の若い女の右手だけが取り残されている。

別の若い女は悲しそうに俯きながら、右手をゆつくり下ろす。

別の若い女

こんなことには耐えられない。なんで死んでるはずの私がこんなこと……

暗転。

夕暮れの光。

冥府の門の傍に門番が背筋をまっすぐ伸ばして立っている。

錫杖を手に持っている。

白い壁には誰もいない。

門番、夕暮れの光が射してくる方角を見やる。

語りの合間に錫杖で地面を叩く。

門番

日がまた沈もうとしている。一日の終わりが仕事の終わりを意味しないのは、何よりも辛い。確かに区切りのないことにも、

いつかは慣れはする。しかし、この慣れが最も恐ろしいのだ。

区切りがないことに慣れる……つまり、終わりがない……という

ことは、永遠……永遠にわたる仕事……ふう……いや、そ

ういうことではない。永遠にだつて一区切りはあつていいはず

なのだから、区切りがあつたところで永遠にはさしたる影響は

ないのだから、区切りがないというのは、なんとというか、秘密

を持つ暇がない。心で受け止めた何かを、感情でも思考でも欲

望でもいい、たとえそれが自分のものでなく、他人のものだと



しても構わない、常に曝け出されたままにしているということだ。傷口を海水に浸し続けるようなもんだ。ゆとりを持って清らかな水を与えるように大切に秘密を育てていき、こつそりとしてどこか片隅に隠すためにはやっぱり区切りが必要なんだ。どんなに薄くて消えかけている線でも、あるかなきかの境目をうろろうしているような優柔不断な波線でも。区切りを仮初の姿でもいいから、内と外、前と後に見立てて、その狭間にわずかでも死後の自分にだけ宛てた遺言を置き残していく。そうした営みがなくてはならん。生きている間は自分自身にさえ明かされることのない秘密。大事なことだ。だが、しかし、そう、俺には夢を見る暇がない。夢という秘密を入れておく箱を持てた試しがない。便利なもんだだろうなあ。どんなものかも知らないが……まあ、ともかく区切りがあっても、永遠には罅ひとつ入ることはないだろう。滅多にないことだが、昨日は偏頭痛で仕事を休んでしまった。頭が割れそうになって、目の前の見えているものもまた割れていきそうになるのを必死に堪え、裂け目を修復するためにこそ、代償としてこの偏頭痛が必要とされているんじゃないかという悪循環に俺は囚われていた。きつと一昨日から続くこの天気のせいだろう。ずっと晴れていたのに突然、雷雨の予感が、あの火をつけた瞬間に顔全体を覆う熱い空気の被膜に似た圧迫感を伴う香ばしい匂いの波を、何度も何度も俺の鼻面に漂わせて、俺の神経を狂わせるにとどまらず、なかなか到来しそうで到来しない雷雨でもって、俺が決して見ることは叶わない夢、そう、宙吊りにされた雷雨の夢を俺の瞼の裏に昼日中から到来させようとしていた。そうしていつまでも焦らされていると、狂気を通り越して、俺は真つ当で平凡なただの門番、冥府の門の守り手ではなく、押せば倒れるような張りぼての門の前で雨に打たれる惨めな自分を夢想し、自分が門番だと妄想するただの浮浪者に成り下がっていったのだ。それが偏頭痛の原因だったに違いない。そして、俺は一日も欠かしたことのなかった仕事をはじめて休んだ。もちろん、誰かに許可を取る必要などない。その誰かっていうのが誰かっていうのは言

わなくてもいいだろう。想像に任せると言うことは、想像不可能と言うことと同じくらい馬鹿馬鹿しいし、一度放たれた言葉はふたつに断ち割られた岩のようにもうひとつを否応なしに存在させてしまう。どういふことか分かるか？本来、ひとつでしかあり得ない存在が、言葉によつて切り離され、もうひとつになるということは、ひとつがひとつのままでもうひとつになるということ、ああ、この先を言うのは気が引ける、つまり、こうして俺が駄弁を弄する間にも数多のもうひとつが生まれ出て、最初のひとつが言葉であつたことを忘れ、次のもうひとつが言葉に過ぎないと思ひ込み、ああ、これはいわゆる死を超過しようとする熱情なのか、この先を言うのは気が引ける、つまり、言葉のひとつと、もうひとつが、生命のひとつと、もうひとつに相似することで、託しているのだ、決して交わらないものに、熱情を。いや、違う。熱情じゃない。ただの熱だ。微温的で、消えかかっている、小さくなり続ける塊のような、それでいて、自分自身を手放さない、ただの熱だ。自分の手だけは誰もが手放さないのはそうしたわけだ。他人の手はいとも簡単に手放してしまふくせに。さよならという言葉は、冷たくなつていくときに見つけたうまい口実なのだ、いつになつたら、生者は気づくのか……これだけは言わねばならない。言葉は影じゃない。言葉は生者の影を食う。影が色づいてくるのが見えな者は、帰らぬ人となつた証を持ち帰る……俺ももう少しで帰らぬ人となるころだつた。それぐらいひどい偏頭痛だつた。仕事を休むことで、俺は永遠を中断してしまつたのではないか。いや、違う。永遠は中断できない。だが、しかし、永遠に区切りを、切れ目を入れることぐらいは大目に見てほしいものだ。そして、たとえ俺が区切りと切れ目の四重奏に罪悪感を覚えたからといって、四重奏というのはもちろん、言葉と生命それぞれに二重性に基づいて言っているわけだが、永遠は俺の方を見向きもしないだろう。誰が咎めるわけでもない。まあ、気休めだろうがな

門番、地面にある何かに気づいて、固まる。

地面にあるいくつかの何かを見ようとするとき、首の動きにつられて、自分の身体ごと回転させる。

一步前に踏み出して、同じ動きをし、二歩後退つて、同じ動きをする。

門番

足跡……草叢に隠れ、昨日から今日にかけての真夜中に降った雨でだいぶ滲んで、かたちは崩れ、消えかけているものもあるが、これは紛れもなく死者の足跡だ。

門番、冥府の門をぐるぐる周回し、立ち止まる。

門番

……ひとりじゃない……ふたり……ひとりは死者になり損なつた者だな……死者よりも深く土が窪んでいるところがそうだ。死者になり損なつた者の身体は、死者よりも生者よりも重く、地面の裏側から引つ張られたかのようにかたちかたが歪になる。俺には分かる。その違いは俺にしか分からないだろう。昨日、誰かが、しかもふたりで、ここを通つていったわけだ。それともここまで来て引き返したか。またはこの冥府の門で潔く二度目の別れを済ませていったか……さすがにそれはないか……二度目の別れに耐えられる者なんか、この世にもあの世にもいはいはないんだ。だとしたら、ふたりしての通過か、逃走か。いや、越境か、撤退か。どう捉えるかで、何もかもが変わってしまう。ふたりが入れ替わることだって……

門番の背後の白い壁の上手から男の手が伸びてくる。

門番は足跡探しに夢中で、男の手に気づいていない。

男の手、女の手を探すが、空を切るばかり。

男の手、空中でなにやら探し当てたかのように感触を確かめ、そこにはないはずの女の手をゆっくりと握り締める。

白い壁の下手の下方から女の子の手が伸びてくる。

男の手と同じく、はじめは空を切るばかりだったが、女の手を見つ

け出し、ゆつくりと握り締める。

下を向いて、足跡を探していた門番、気配を感じて、ぴたりと動きを止める。

曲がっている身体を起こし、直立して前方を見つめる。

門番、大きく溜息をつき、首を横に振る。

そして、ゆつくりと後ろに振り返っていく。

門番の動きと合わせるようにふたつの手も、存在しないはずの女の手を離して、ゆつくりと引っ込んでいき、門番が振り返り終わる前に姿を消す。

門番、身体をねじ曲げた状態で白い壁を見つめる。

## 門番

ああ、もうここにはいられないのかもしれないな。長くは持たないだろう。いずれ数多の手によって、冥府の門は打ち壊される。かつて、今も、これから、破壊に導くのは、死者と、生者と、亡霊と、狂人の、手また手。諦めるしかないのか。手は繋がり合っていても、いなくても、切り取られていても、いなくても、単独者としての責務を果たそうとするだろう。ひとりからしか手は生まれ得ないのだ。手だけを生産する単独者が住んでいるのは、ここからそう遠くない、草原を越えた先にある多数の死者と、少数の死者についていった者たちが暮らす街。俺は行ったことがないが、というより行けないが、知っているし、見たこともある。どこからだったか。草原の丘……いや、違うな。高いところからじゃない。もつと低いところ、そう、落とし穴から見上げているかのような……そこからは四方八方を見渡せて、街の人たちが行き交う様を眺められ、そのときは歩きながら前後に揺れる手ばかり見ていたっけか。死者と狂人の恋人たちの手や、生者と亡霊の親子の手が、繋がる瞬間と離れる瞬間を目撃できるのは、なんとという至福の時間だったことか。運命が生まれ出る瞬間に立ち会っているんだと、感嘆の声を上げたものだ。手が離れた後には、繋いでいた相手がゆつくりと消えていく。なんといいっても、彼ら、彼女らは、単独者なのだから、致し方ない。役目を見出しては放棄するまで

が、手に課せられた責務の全過程なのだ。

門番、また下を向いて、冥府の門から下手へ足跡を追っていく。

門番

これは……死者に連れて来られた生者の方の足跡だ……街の方角に向かっている……くそつ、厄介なことになった。むしろふたり揃って引き返してくれていた方がよかった。死者の方は？……こつちの方に行っても何もないのに……まあいいさ、こつちは消えていくだけだ。問題は生者だ。街はもう定員に達している。街に辿り着く前に追いついて、連れ戻さなければ……

門番、足跡を追って、舞台下手へと消えていく。

暗転。

冥府の門が打ち壊され、瓦礫となつて辺りに散らばっている。

しばらくの間、何も起こらない。

白い壁の上手から男の手がためらいがちに伸びてくる。

少しだけ現れて、すぐに消える。

白い壁の下手から女の子の手がためらいがちに伸びてくる。

少しだけ現れて、すぐに消える。

しばらくの間、何も起こらない。

再び、白い壁の上手から男の手がためらいがちに伸びてくる。

再び、白い壁の下手から子供の手がためらいがちに伸びてくる。

今度は逡巡しつつも、すぐに消えたりはしない。

徐々にはあるが、ぴんと腕を伸ばして、互いの手を求め合う。

だが、距離があるために届くことはない。

しばらくの間、そのままの状態が続く。

そして、突然、力尽きたかのようにぱったりと消える。

しばらくの間、何も起こらない。

舞台下手から若い女が現れる。

砕け散った冥府の門を見て、驚く。

若い女 一体、何があつたの？

若い女、冥府の門の瓦礫の間を歩いて、破壊の爪痕を見下ろす。

若い女

もしかして、私のせい？そんな気がしてならない。本来、ここにいる私は、二重の意味であり得てはならない私。過去の私でもあり、死んでもいないのに死後の世界にまで付いてきてしまった私。そして、もう私は私ではない。もうひとりの私、別の私としてあり得てしまったのだから。取り返しがつかないことを私は自覚していながら、敢えて実行に移した。今の私ではない私が意志したことだと、言い訳にしかならない言葉を吐いても、手遅れであるどころか、過去に對して途轍もない害悪をもたらしてさえいる。むしろ手遅れであることを、今の私も、今の私でもない私も、心のどこかで喜んでるに違いない。だって、私はあなたに再会できたのだから。心の底から喜ばなくては嘘になる。取り返しつかない時間と、手遅れの愛に育まれていく純粹な喜びにかかれば、冥府の門もひとりで打ち壊され、私の眼前に広がるような惨状を呈するまでに至つてもなんら不思議ではない。そのうちこの残骸も塵と化して跡形もなく消えていくだろう。今の私である私が、あなたとの再会を望んだ結果、私の存在そのものが破壊と化したかのように。

若い女、冥府の門の瓦礫の間を通り抜けて、下手に振り返る。

若い女

それにしても、あの街はなんだつたんだろう。草原と地続きに高層ビル群の林立が始まり、中心部に向かうにしたがつて、みずぼらしい露店が並び、売られているものといえ、野菜や果物以外はそれほどだが、がらくた同然の何に使うのか判然とはしないものばかり。露店に挟まれた通りには、あちこち落とし穴が空いていて、落ちないよう注意しながら

歩いていると、ろくに並んでいる商品も見られなかったけれど、視界を掠めていくときに私の脳裏に焼きついて、まるではじめからそれが目的だったかのように私の想像を餌に自由を獲得し、かたちを自在に変えたり、組み合わせたりして、私の眼前を飛び回り、途端に想像の世界だけに対応可能な有用性を見出したかのように、これは料理に、あれは洗濯物を干すときに、それとこつちは壊れた家具を直すときに、あつちは綺麗な花を咲かせるためのガーデニングのときに、といつた具合に覚醒を果たしていった。落とし穴と見紛う水溜りもあつて、不可思議な光の加減で真つ黒に見えることもあれば、真つ青な空を映し出していることもあり、足を踏み外した者には、地の底に落ちるか、天の頂に落ちるかの選択肢が用意されているみたいだった。そうしてしばらく器用に落とし穴と水溜りを避けながらステップを踏んでいた私の足を止めさせたのは、一斉に私を指差している数多の手だった。肩から先の腕ごと切り取られて、台の上に陳列された、握手を求めかけて相手から拒絶されたときのようにならば開きかけた状態で人差し指が、落とし穴と水溜りに挟まれた私に向けられていた。はじめは義手だと思っただけど、本物の手だった。死んだふりをして、息で上下する腹部のように時々痙攣しているものもあつた。この街に住む人々は日々、手を付け替える習慣でもあるのだろうかと考えて、私はひとつ重要な点に思い至っていなかったことに気づいた。ここまで誰もすれ違わなかった。草原を夜通し歩き続けて、朝方に着いたから、人通りが少ないぐらいであれば分かるにしても、人つ子ひとり見当たらなかった。高層ビルの日の光を反射する嵌め殺しの窓の向こうにも、薄暗い露店の台の後ろにすら、影の片鱗ひとつ。もしかしたら、落とし穴と水溜りの位置には人がいて、私に見えていないだけか、あるいは皆が皆、落ちていった後なのか。いずれにしても、人々はかつては見えただけで、存在してはいたはず。そして、私はこうも考えた。露店のがらくたと同じで、私の想像の世界での切り

取られた手たちは、自由と本来相反するはずの有用性を取り戻し、人々の身体の収まるべきところに収まって、繋がったり、離れたりを日々の営みのように繰り返しているのだと。大気の壁から生え出たように切り取られた手が、どこかから伸びてきて、私に触れたような気がした。私の肩、私の二の腕、私の背中、私の腰、私のお尻、私の胸にまで厚かましくも指先で、または掌で、そつとるときもあれば、突き飛ばすようなときもある力の強弱で触れてきて、私の身体の膜を揺り動かし、破ろうとしているみたいでもあった。終いには私の髪、私の顔を撫で始めて、輪郭を確かめることがそのまま輪郭を描き出すことになると言わんばかりに何度も何度も私をなぞつていき、私をかたちづくろうとしていた。何のためか？数多の手は私だけじゃなくて、私たちに触れようとしているから。今の私ではない私、私の向こうにいる私、本来はここに来ているべきだった私、私を見捨てた私、私が連れて来られなかった私へと。未来と過去の入れ替えを、以前からの約束を、然るべきときに果たすべく待ち受けていたと言わんばかりの血走った目で見つめるように、手たちは内側から紅潮していく。私へ深紅の花束を贈呈しようとしているみたいに。そのとき、高層ビル群の陰で、一日中、日が当たることはないだろう鐘楼から鐘の音が響き始めた。見えているのに、見えないところにあるような薄暗がりから、それ以外の物音の一切を消し去り、高層ビルの窓ガラスを震えさせて……恐くなつて、私は引き返してきた。

若い女の背後の白い壁。

上手から男の右手がゆっくりと伸びてくる。

若い女、振り返り、男の手の存在に気づく。

男の手が握り返してもらうのを待つ恰好で止まる。

下手から女の子の左手がゆっくりと伸びてくる。

若い女、女の子の手の動きをじっと注視している。

女の子の手が握り返してもらうのを待つ恰好で止まる。



突然、鐘の音がどこからともなく響き始める。

若い女、空を見上げる。

鐘の音はどんと大きくなっていき、いくつもの鐘が同時に鳴り響く。

若い女、一步、足を前に踏み出す。

そして、次の一步、次の一步と白い壁に近づいていく。

辺り一面、白色に染め上げるように照明が強まっていく。

若い女、白い壁の前に辿り着き、二人の手を見下ろす。

白い壁を背にするために振り返り、自分の両手の位置を確かめる。

両手を同時に男の右手と女の子の左手に近づけていく。

手が触れ合いそうになるにしたがって、若い女は微笑みを取り戻していく。

もう触れ合ったかというところで、暗転。

暗闇のなかでも鐘の音は鳴り渡っているが、次第に小さくなっていく。

徐々に明るんできて、白い壁の前に立っているのが若い女ではなく、女であることが分かる。

女の両手は誰かの手を握っていたかのよう。

女の両隣の手は既に消えてしまった後だ。

女は俯き、身じろぎひとつしない。

しばらくして、白い壁から身を引き剥がそうとするかのように肩を揺り動かす。

腕を動かそうと、腰を動かそうと、脚を動かそうとするも、白い壁から離れられない。

何度か同じことを繰り返すが、女の表情は変わらない。諦めと憔悴。

何度目かの挑戦で左肩だけが白い壁から剥がれるが、他の部分は張りつけられたままで、バランスの悪い姿勢になる。

続いて、腕を引き剥がし、腰を引き剥がし、最後に脚を引き剥がした瞬間、前方に女の身体は倒れる。

女は歪な姿勢で倒れたまま起き上がらない。

白い壁の上手から男がすつと姿を現す。

倒れている女の傍に立ち、女を見下ろす。

男、目を閉じる。

男、目を開き、ゆつくりとその場にしゃがみ込んで、女の身体を座ったまま腕に抱える。

女、男の腕のなかでゆつくりと目を覚ます。

見つめ合う二人。

女、手を伸ばして、男の頬に触れる。

二人、ゆつくりと目を閉じる。

暗転。

白い壁の前、女は歪な姿勢で倒れたまま起き上がらない。

白い壁の下手から別の若い女がすつと姿を現す。

倒れている女の傍に立ち、女を見下ろす。

別の若い女、目を閉じる。

別の若い女、目を開き、ゆつくりとその場にしゃがみ込んで、横たわり、女の身体にそつと身を寄り添わせる。

額と額を合わせて、別の若い女はゆつくりと目を閉じる。

二人は目を覚さない。

暗転。

白い壁の前、若い女が歪な姿勢で倒れている。

若い女、目を覚まして、半身をゆつくりと起こす。

あらぬ方を見つめ、しばらく茫然としている。

そして、ゆつくりと立ち上がり、散らばった冥府の門の残骸の辺りへ歩いていく。

冥府の門の残骸に囲まれ、若い女は下手の方を振り返り、それから

白い壁を振り返って、上手へと立ち去る。

下手から門番が後ろを振り返りながら、現れる。

## 門番

どこにもいない……禁を破って、街に入り、人々から奇異な目で見られながら、街中隈なく探したというのに……落とし穴にも落ち、水溜りを踏んで、汚れた水を盛大に撥ね散らかし、脚を棒にして歩き回ったというのに……どこにも見当たらず……

門番、冥府の門が瓦礫と化している様を見て、愕然とする。

## 門番

なんてことだ……思った通りの結果になっているのに、やはり口をつけて出るのは、決まりきった言葉でしかないか……如何なる中し得た予想も、感情を制御し得ない。故に予想は過去に侵入する。過去の感情にであれば、手を差し伸べられて、予想通りの結果と同じく予想通りの感情に導けると錯覚している。思い上がりも甚だしい。感情が予想を裏切るのではない。感情は予想の範疇には属していないのだ。しかし、一旦は過去が侵入を許したことになり、予想と感情の癒着を引き起こして、どのような論理的な思考をもつてしても、ふたつの区別をつけられなくなり、冷静に狂っていく。未来を過去の一面に組み込めたという譫妄じみた観念に取り憑かれ、安定した現在の間隔を切り崩していき、現在への帰り道を見失う。そして、ある日突然、過去に堰き止められていた感情が溢れ出し、その蓄積が静謐な湖を形成して、あり得たかもしれない未来と、あり得なかつた未来が手を取り合い、水鏡に狂気の地図を広げる。そこに住むと決めた者にとっては安寧の方こそが、調和を乱すものと見做される。なぜなら、幻影を破るのは決まって心の平静さだからだ。対極に位置するふたつの静けさの狭間で揺れ動いている者では、静謐の湖の細やかな変化のひとつにも、岸辺を舐める細波を含めた全体の景観にも焦点を合わせられないだろう。偶然、溺れる者を発見し、その手を掴もうとして、静謐の湖に勢いにまかせて頭から飛び込んで、一刻も早く助けたいと泳ぐ手を速めても、水面には細波ひとつ立たないし、水鏡には水を切る泳ぎ手の身体ほんの一部でさえ映らないだろう。対して水面下での激しさは、泳ぎ手の脚を攣らせる。内部の淡

水の奔流、つまり、感情の透明な繭に包まれた決して燃え移らない火によつて、ひた隠しにされていた未来とも、過去とも、一切関係を絶つた現在が、今まさに細波を泳ぎ手の肢体に侵入させ、水鏡に映る分身と影をしなやかで痛ましくもあるくねる肢体に侵入させ、一向に溺れる者に辿り着けない悲しみで、深く深く前方を下方へと沈めていく。暗い暗い湖の底に下り立ち、揺蕩う光の帯で明るんだ水面を見上げると、溺れていると目に映っていた者は、実はただ身体を水の流れにまかせて横たえ、受動的で無防備な浮き沈みを繰り返しているのに過ぎないことに気づく。必死に助けようとしていた者は、不覚にも安らかさを感じてしまう。そして、溺れる者の思惑通り、過去そのものが移り変わつていく感情そのものだったと認めなければならなくなる。過去は制御し得ない。過去は確定していない。過去は自由を野放しにしておき、いざ変化を求めようとしたときに、未来に放たれていた自由を自らに介入させる。これが女と水の物語。女と子供の物語だ。女は我が子を探しに静謐の湖へと赴いて、溺れる我が子を発見するに至つたのだつた。その後、顛末は、今言つた通りだ。そうして、時間の籬が外されたがために、冥府の門は打ち壊された。この門はまた水門でもあつたのだ。

門番、ふらつきながら、舞台中央まで歩いていつて膝をつき、冥府の門の瓦礫に触れる。  
いざつてゆきながら、次々に瓦礫に手を置いていく。  
力が抜けたように瓦礫の表面から手が滑つていき、項垂れる。  
暗転。

女が舞台上手から現れる。

冥府の門の残骸を見渡し、大きく息をつく。

女　　ここは随分と変わり果ててしまった。もう来ることはないはずだ  
と思つていたのに……

若い男が舞台下手から現れる。  
女と若い男はお互いの存在に気づいて、視線を交わす。

若い男 やあ。久しぶり。

女 ……

若い男 あの日のことは……あの日のことは……

女 何も言わないで

若い男 ああ……

間。

女 やつぱり言ってもいいよ。言いたければ……

若い男 ああ……俺たち、一緒に死んでなかったんだな。

女 ええ。

若い男 もし……もし、同時に死ねていたらよかったと思うかい？

女 ……さあ……どうだろう……

若い男 じゃあ、生きていてよかったと思えるときもあった？

女 ええ……あるときまでは……

若い男 それは……言うまでもないことだけど、俺たちの娘が死んだ

ときまでで合ってるよね？

女 ……

若い男 やつぱりこうして言葉で確かめておかないと、だいぶ昔に死

んでしまった俺には、落ちてこないんだ。分からないんだ

よ。受け止めるための感情を失くしてしまったのかな……で

も、言葉にすると、土が雨を含んで地下水脈にまで浸み入ら

せていくようにしつくりくるんだ。いつの日にか、あるいは

どこか別の場所で、川となるために地上へと溢れ出し、湖と

なるか、海へ至るかの違いはあるけど、循環への意志の可能性

だけを残して俺たちは光の射さない真っ暗なところで安らつ

てるんだ。死者には言葉しか残らない。言葉だけが循環への

意志を打ち砕き、堰き止めようと書き記した書物でもって、

意図せず死者を循環させてしまふんだ。まるで焦りに焦って  
転んだ子供が怪我をして、約束の時間、約束の場所に間に合  
わず、入院中に死を待っている老人たちを無邪気な姿で喜ば  
せ、死を待つことが生まれ直しを待つことに変質していくみ  
たいに……だから、君はこうして俺に、若い頃の俺に会いに  
来れたわけだろ。俺がこうして君に理解不可能なことを語り  
かけられるのも、伝達不可能に陥らなければ、君を生かせら  
れないからだ。たとえば、囚われの身にならざるを得ないとし  
ても……君の身体は俺の言葉を浸潤させていくことでなんと  
か命脈を保っている。そして、俺たちの娘が、死んでからも  
なお成長を続け、時間を結晶化みたいに美しい姿を纏って、  
俺たちの前に現れてくれたこともまた言葉と同じでその意味  
が伝わっていないんだ。伝わったら、娘は成長しなかつたは  
ずだし、むしろ赤子のときのような思い通りにはいかない厄  
介さで、それを喜びの糧にして、一緒に過ごしたときだけの  
思い出に耽っているほかないだろうから。死者とは循環その  
ものになろうとして失敗し、次へと託せるものだけを選抜し  
て、呪いの受け渡しみたいに沼へと放り投げるんだ。でも、  
それは大変に美しい沼なんだよ。涼しいそよ風が気持ち良  
くて。いつか水の底から澄み渡っていくという希望に浸れて  
……分かるだろ？だから、君は帰るんだ……帰らなきゃいけ  
ない……帰れ。帰ってくれ。  
……

女

女、若い男に黙って近づいていき、手を伸ばして、若い男の頬に触  
れる。

女、手で若い男の顔全体に触れていき、目を閉じる。

女

ちゃんと見えるよ。私の想像じゃなくて、瞼の裏に鮮明に。これ  
以上は見ることを突き詰められないほどに克明に。だったら、あ  
なたは死んでなんかないはず。永遠に死につつあるだけ。死と  
接する境目で底なしの闇に落ち続けて、いつの日にか差し伸べて

くれると希求する手に向けて、めいっばい腕を伸ばしている。あなたの手と腕以外はもう影と成り果てても、あなたの手と腕には光源の定かではない光が当たっている。私に救い出されるのを待っていると思つて、私はここまで来たの。だから、あなたの抵抗は私には無意味。私は何度だってあなたに会いに来る。あなたの手を必ず掴む。

女、手を若い男の顔から首、肩、腕、手へと撫で下ろしていき、目を開けて、手を握る。

女、もう片方の手で若い男の肩をそつと押し、膝をつこうとする動きで、若い男に横になるよう促す。

女と若い男、身体を寄せ合つて横になる。

女、握り締めている手で若い男の手を自分の腹部へ当てさせる。

女 子供ができたの。

若い男 えっ？誰の子だい？俺の知らない……

女 あなたよ。

若い男 それは無理だよ……俺の子じゃない……

女 いいえ。あなたよ。あなたの子じゃない……

若い男 ……

女 あなた自身よ

舞台上手から別の若い女が現れる。

別の若い女、寄り添い横たわっている二人を見つめている。

別の若い女

そう、永遠に死につつあるのなら、もう一度身籠ればいい。手を差し伸べるためには、もう一度生み直せばいい。

い。生まれてきたばかりの手をしっかりと掴んであげればいい。ママはそう言つてるのよ。パパ。私とあんまり歳の違わない、随分と若いお父さん……

舞台上手から若い女が現れる。

若い女、寄り添い横たわっている二人を見つめている。

若い女 さあ、時が来た。過去の私は未来の私に向けて、手を差し伸べる。その手は過去の私自身を引き上げる手でもあるし、あなたを引き上げる手でもあるし、私たちの娘を、私たちの成長して大人になつていたはずの娘を引き上げる手でもあるし、私たちのじゃない子供たち、私たちの、私たちのじゃない、両親、祖父母、友人たち、そして、過去の、未来の恋人たち、すべての最愛の人たちの手をしっかりと掴んで離さない手でもある。世代を越えて、私たちがもう生きていないだろう時代の人々に向けて、死後の世界の、私たちより先に安息の地へと旅立つていった亡霊たちに向けて、すべての最愛になるための生きとし生けるものに向けて、差し伸べられる手でもある。

若い女、寄り添い横たわっている二人に近づいていき、若い男に手を差し伸べる。

若い女 ほら、こうやって。

若い女、若い男の手を引つ張り上げ、若い男が身を起こすのを助ける。

若い男、立ち上がる。

若い男のもう片方の手はまだ横たわったままの女の手を握り締めている。

別の若い女

私は生きられなかった。生きて、ママとパパに手を差し伸べることができなかつた。一緒に時を過ごしていくなかで、何気ない日常のやり取りの最中に、そつと触れ合わせる手のように生きて傍にいたかつた。けれど、気づいたの。ほら、こつち側からでも、私、手を差し伸べられるんだよ。



別の若い女、横たわったままの女に近づいていき、女に手を差し伸べる。

別の若い女と若い男、女が身を起こすのを助ける。

女、立ち上がる。

四人は手を取り合って並んでいる。

女は若い男の顔を見る。

若い男も女の顔を見る。

若い女と別の若い女も女の顔を見る。

女、頷く。

女、若い男と繋いでいる手を離す。

続いて、別の若い女と繋いでいる手を離す。

続いて、若い女も若い男と繋いでいる手を離す。

若い男と別の若い女は下手へ位置を変えて、二人で手を繋ぐ。

女と若い女は上手へ位置を変えて、二人で手を繋ぐ。

女と若い女、若い男と別の若い女で向かい合う恰好になる。

女

さよなら、愛しい人。さよなら、愛しい子。ずっと愛し続ける。

どんな日も。どんなときも。雨の降りしきる日でも。真夏の光の

照りつける湖で溺れそうになるときでも。一行一行、詩を書き

綴っていくように心穏やかに。そう、書くように私はあなたたち

を愛し続ける。言葉だけが私に残される。たとえそれがどんなに

辛くて、苦しくて、切なくて、悲しくて、死にたく……死にたく

なつたとしても、言葉の手は差し伸べ続ける。約束する……さよ

うなら……

女と若い女、手を取り合ったまま、上手から立ち去る。

手を取り合ったまま、二人を見送る若い男と別の若い女。

暗転。

無数の鐘の音がどこからともなく鳴り響く。

無人の舞台。

白い壁。

上手から女の手がゆつくりと伸びてくる。

下手から男の手がゆつくりと伸びてくる。

白い壁が引き戸のようにスライドして、ふたつの手を近づけていく。

ふたつの手が互いに届いて、しっかりと握り合う。

暗転。

無人の舞台。

白い壁。

上手から女の手がゆつくりと伸びてくる。

下手から女の子の手がゆつくりと伸びてくる。

白い壁が引き戸のようにスライドして、ふたつの手を近づけていく。

ふたつの手が互いに届いて、しっかりと握り合う。

暗転。

無人の舞台。

白い壁。

上手から若い女の手がゆつくりと伸びてくる。

下手から若い男の手がゆつくりと伸びてくる。

白い壁が引き戸のようにスライドして、ふたつの手を近づけていく。

ふたつの手が互いに届いて、しっかりと握り合う。

(手の握り方が先ほどとは変わっている)

暗転。

無人の舞台。

白い壁。

上手から若い女の手がゆつくりと伸びてくる。

下手から別の若い女の手がゆつくりと伸びてくる。

白い壁が引き戸のようにスライドして、ふたつの手を近づけてい

く。  
ふたつの手が互いに届いて、しつかりと握り合う。  
(手の握り方が先ほどとは変わっている)  
暗転。

無人の舞台。

白い壁。

上手から女と若い女の手が同時に伸びてくる。  
下手から男と女の子の手が同時に伸びてくる。

四つの手が触れ合おうとするところで、それぞれのもう片方の手と、他の人物の手すべてが同時に伸びてくる。  
すべての手が重なり合う。

暗転。

白い壁を背にして立っている女。

女、終始俯いて、両手を左右に伸ばしている。

白衣に両手を突っ込んでいる精神科医と見知らぬ男が舞台上手寄りに立って、女を眺めている。

精神科医

朝から晩までずっとこの調子で。礫にでもなっているつもりなんですかね。ベッドに寝かしつけようとしても頑として動かないんです。鎮静剤を打って、拘束着を着せて、ベッドに縛りつけても、どうやってかは分かんのです。朝になるとこうして突っ立てるんです。眠ったかどうかも定かじゃない。だから、このままにしておくことにしました。夜が更けて、脚が立っていることに耐えられなくなる、自然とその場で倒れ込んで眠ってるもんですから。それこそ死んだように静かに。ただ朝になるとまた礫になってと、その繰り返しで。しかし、本人の意に背いたことをさせ続けても、悪くなるだけなので、好きなようにさせた方がいいと思いますね。

見知らぬ男、一步前に進み出て、真剣な面持ちで白い壁の前の女を見つめる。

精神科医

ところで、遠い親戚で、今日は見舞いでもなく、取材でいらしたということでしたが、ジャーナリストの方ですか？

見知らぬ男

いいえ、違います。

精神科医

すると、何をされていらつしやる方？

見知らぬ男

手を作っております。

精神科医

手？手ですか？……ああ、義手のことですか……しかし、そのような方がなぜ精神病患者の取材に？どちらからいらつしやたんですか？

精神科医、不審な目で見知らぬ男を見る。

見知らぬ男

街から……草原の向こう、打ち壊された冥府の門を越えて、ずっとずっと先へ行つたところ、高層ビルに囲まれて、地面には落とし穴と水溜りばかりがある、鐘の音が聞こえる街から……先生。もう少し近づいても？

精神科医

ええ、まあ大丈夫ですよ。危害を加えるようなことはありません。ですが、その前に少し別室でお話を。

精神科医、見知らぬ男の肩を掴む。

見知らぬ男、精神科医の言葉を無視する。

見知らぬ男

……見えるよ。ちゃんと。しっかりとこの目に映ってる……聞こえるよ。ちゃんと。しっかりとこの耳で聞いている……約束、だったからね。

女の頬を涙が一筋流れていく。



